

第一回 鳴海英吉研究会

〈日時〉二〇〇四年九月四日(土)午後二時～六時

〈場所〉神楽坂エミール

〈主催〉鳴海英吉研究会 『鮫』芳賀章内、『炎樹』佐藤文夫、
『COAL SACK』鈴木比佐雄、大掛史子

〈プログラム〉

司会…芳賀章内、鈴木比佐雄、山中真知子

◎第一部 記念講演(鳴海英吉と『列島』の詩的精神)

講師…長谷川龍生 >>>

◎第二部 その一 無声映画上映

『キートンの警官騒動』『瀧の白糸』
活弁士…万葉(ばんだ)るり子

その二 鳴海英吉の朗読映像放映 >>>

◎第三部 朗読…武力也、

三味線伴奏…米沢希英 >>>

◎第四部 シンポジウム「鳴海英吉を俎上に

——その多彩な魅力に迫る井戸端会議」

コーディネーター…大掛史子

パネラー…水崎野里子、鈴木文子、山本聖子、

玉川侑香、岸本マチ子、田上悦子 >>>

第一回 鳴海英吉研究会

◎第一部 記念講演〈鳴海英吉と『列島』の詩的精神〉

講師…長谷川龍生

【開会の挨拶】

芳賀章内 本日は「第一回鳴海英吉研究会」にご参加下さり、ありがとうございます。わたしは『鯨』の芳賀章内と申します。

鳴海さんが参加していた雑誌が主に四つありまして、『炎樹』の佐藤文夫さんのところ、それから『COAL SACK』の鈴木比佐雄さんのところ、それから『光芒』に属しておりまして、わたしの『鯨』というように、主に四つに多く作品を発表しておりまして、この会はその四つの会で中心になってやろうということで「第一回」ということになりました。

それで、わたしがいちばん年長なものですから、最初の挨拶をしろうというご指名を受けたわけがあります。それで実は、この会の実際は鈴木比佐雄さんが非常に一生懸命おやりになっていて、こうやって見ておりましたら鈴木さんの出ているところは無いということもありまして、実はわたしはそれでご挨拶だけ、中身の説明は鈴木さんにやってもらうのがいちばんいいかなと思います。

とにかく第一回ということで、「鳴海さんの人気」というものがこの会を第一回というふうに銘打ってやるということになりました。恐らくわたし個人の推測では、鳴海さんはいちばん日本人的な民衆像というものの一つの形を持っていた人ではないかというように実は思っておりました。それが皆さんの心の中にしみわたって、それぞれ人気次第に深くなっていったのではないかと思います。鳴海さんの作品の中には上流階級に向かってものを言うという発想なんてほとんどなくて、ほんとに庶民的な、あるいは民衆的なレベルで、同じ目の高さでどんな人にも付き合っているし、作品自体もそういう形でできております。それがいちばん人気の秘密ではないかというように僕は思っています。

今日はその第一回ということなものですから、二つのテーマがあるようにわたしには思えました。一つは「詩的な発想」。いわばこれから出て行くという基本的な場としての『列島』——ここから詩人としての活躍が始まるわけです。それでそこに焦点を当てて長谷川龍生さんに『列島』を通した話をさせていただくと、それからもう一つは、自分が生きてきた、鳴海さんが生きてきた背景、そういうものに焦点を当ててみる。彼はなぜ民衆的であるか。彼はどうして庶民的であるか。そういうものがどこにあるのかという、その背景を探るというような感じで、お父さんが活弁士であった、それから浪曲の詞も書いている、そういう庶民的なレベル、日本的なレベルをずっと持ってきて、それでなおかつ活弁といういわば日本の語りの、最後であるかどうかわかりませんが、まあそういう語りの世界を持ったその活弁というのが鳴海さんにはある。そういうことがあって、お父さんが活弁をしておったと。そういうのも今日はご紹介しながら第一回の鳴海英吉の論を展開したいと思います。

このマイクはすぐに鈴木比佐雄さんにお渡ししたいと思うのですが、鈴木さんは、鳴海英吉詩集に「鳴海さんは七つの顔がある」と……何かミステリーみたいな感じですが、そういうことを書いています。そういうことを一つずつやっても七回できるというわけですが、とにかく今日はいちばん大事な基本的な戦前から戦後へ、戦後から二十世紀をギリギリのところまで頑張ったそのところに焦点を当てさせていきたいと思います。

それでは、この全体の構成とそれからそれぞれの先生方をお願いしたり、あるいはこれの宣伝や構成に非常に気をお遣いになりました『COAL SACK』の鈴木比佐雄さんにこのマイクをお渡ししまして、わたしのご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。……(一同拍手)……

鈴木比佐雄 『COAL SACK』の鈴木です。

鳴海さんが亡くなられた時に鳴海さんを後世に残そうというような気運が高まりまして、四つの雑誌が中心になって全詩集を作ろうということで『全詩集』をああいような形でまとめたのですが、その時に、後世に残すということは、全詩集を出せばそれでおしまいということではなくて、われわれの中で研究会というような機運が持ち上がってきたのです。

今回は、鳴海さんは戦後初め詩誌『列島』に参加したもので、『列島』の方に講演をしていただくということで『列島』の中心だった浜田知章さんにそのことを相談したら、それは長谷川龍生さんがいいだろうということで、長谷川龍生さんに講演をしてもらうことになりました。

と同時に、わたしの中学時代の先生でギャラリーを開いている方がおられて、そこで活弁を初めて見たんですね。全詩集が出たもう二年近く前なのですが、その時に活弁をして下さった万籾り子さんに「鳴海英吉さんという方がいて、将来研究会をやる時にぜひ活弁をやって下さい」ということで予約をしておきまして、第一回の研究会にはやってもらおうということをお願いいたしました。

第三部では、この前の出版記念会の時も皆さんにほんとうに感動を呼び起こした武力也さんに、もう一回朗読をしてもらおうということになりました。

あとシンポジウムはですね、鳴海さんはすごく女性にもてるもので、他の実行委員から今回はちょっと女性だけのシンポジウムをやったら面白いんじゃないかということで、そういうような構想を立てまして今日を迎えました。

それから、ちょっと講師の長谷川龍生さんをご紹介したいのですが、わたしは学生時代から詩を読んでいたのですがその時に、あの頃読んでいた現代詩文庫で「パウロウの鶴」だとか「理髪店にて」だとか、あと「追う者」ですね、それらを読んで非常に感銘を受けたんですね。あと、わたしは評論にも関心があったので、思潮社の「現代詩論大系」の中で、あれが五～六巻あったと思うのですが、その中の第一巻に『移動と転換』という長谷川さんの詩論があり、それを読みまして、それは今でも時々読み返しているのですが非常に新しく、つまり、外部世界を瞬時のうちに内部にと取り込んでいくという、何ですか静的なものの中に動的なものを見ていくとかですね、鋭い詩論なんですね、外部と内部を統一していくとか、今でも通用するような方法意識を持って詩を初めに書かれていた。詩作だけではなくて本質的な詩論を持っていた。それがですね、一九五〇年という二十代前半ですよ。今の二十歳そこそこの若者が書ける文体でも内容でもないですよ。そういう詩人で、あと浜田さんと一緒に『山河』をやられていたということで、今でも現役で素晴らしい詩を書いているということです。この詩人にどうふうに鳴海さんを読んでもらえるか、今日はとても関心がありまして、少しドキドキしているのですが、またこれをテープ起こしをしまして、今日来られなかった方にもご紹介したいと思っています。

それでは長谷川さん、お願いします。

【第一部 長谷川龍生氏 講演〈鳴海英吉と『列島』の詩的精神〉】

長谷川龍生でございます。第一回の研究会の講演に相応しいかどうか非常に自分なりに大疑問を持っておりまして、お招きを受けて大変ありがたく思っております。

わたしは今年の六月十九日に七十六歳になりまして、人生百年と計算しますと、その四分の三をやっと超えました。身体はあんまり調子良くないのですけれども……かううじて……生き抜いております。そういう立場から鳴海さんをわたしなりに振り返り、あるいは勉強していきたいというふうに思っております。

一九六三年十二月十八日に、わたくしは友人の木島始という詩人——先だって亡くなりましたけれ

ども、それとロシア語のできる岩田宏——もうひとつの名前は小笠原豊樹と言いますけれども、その三人でソビエト作家同盟から招待を受けまして、共産党関係の哲学者三名と一緒にナホトカへ一九六三年十二月十九日の到着きました。……接岸したわけです。「ナホトカ」というのは、日本語に直しますと「めつけもの」ということで、外国の或る船の測量士が日本海をずうっと遡っていきそこに一つの不凍港を見つけたので、「めつけもの」というふうに行ったようですけれど。

わたしがナホトカへ着いた朝わたしの眼にいちばん最初に飛び込んできたのは、ナホトカ港のいろんな公安施設ではなくて、ナホトカの外れにある或る民家の非常に貧しい家屋と、それから冬の朝の物干し……「竿」じゃなくて物干し「綱」に引っかかっている干し物であり、洗濯物でありまして、その洗濯物の色が非常にもう洗濯し洗濯し尽くした青色のシャツだとかその他の物が……どんよりしたナホトカの早朝の風にふらりふらり揺られておりまして、非常に原始的な、非常に日本の数十年前の昔を思い出すような風景でありました。

それで、鳴海英吉さんのナホトカのいろんな詩を読みまして、読んでいるうちにナホトカのいろんなことが次々に思い出されてまいりました。ナホトカで、恐らく収容所でありましょうけれども、そこで亡くなった人の墓地へ画家の赤松俊子さんと一緒に肅々と行ったことを思い出します。その日本の兵隊さんのそこで亡くなったおびたしい墓地を管理している年寄りのロシア人のおじさんが居まして、それがきれいにその墓地を清掃しておりました。……そのおじさんへ赤松俊子さんは一枚のスカーフを差し上げていたのを、今思い出します。

それからずうっと、翌年の一九六四年二月二十二日にソビエト……シベリヤ鉄道に乗って、ハバロフスクから今度はレニングラードへ行って、レニングラードからモスクワ、モスクワから白ロシア、ウクライナへ行ったり、それからチェコスロバキアへ行ったりして、約一カ月半か二カ月くらいかかってもう一度ナホトカへ帰ってまいりました。行きしなの船の旅は良かったのですが、帰りはナホトカで材木船の出航するのを待って、その材木船に乗って今度は東京湾の川崎まで帰ってまいりました。その時もナホトカの街を歩いたりして街の様相を眺めました。北朝鮮系の通訳の人達と話したりして、そういうことも思い出します。

鳴海英吉さんのこの鈴木比佐雄さんを中心にしてつくられた『全詩集』を手にしめて……これはどこの頁を開いてもすぐに読んでのめり込んでいけるという、非常に実にもごとな、編集をしております。あるいは、鳴海英吉さん自身はそういう他者を惹きつけるタイプの詩人であったと思うわけです。だからわたくしは、これを頂いて机のすぐ下の棚に置いて、これをしょっちゅうどこを開いても読んで……読むようにしているわけですけれども……たえず読者に、あるいはわたくしだけかもしれないかもしれませんが、眼を覚醒させるという、目を覚まさせるという、非常に面白い、かつみごとな作品群でありました。作品が上手いとか下手とかということじゃなくて、……読んでいるわたくし自身が鳴海英吉という他者の人生をつかむことができる、鳴海英吉の人生を共に生きるような気持ちになりうるという、これはみごとな全詩集であります。

つまりコミュニケーション、つまり人間と人間とのコミュニケーションというものは……コミュニケーションをする相手の、そしてそれは隣人ではなくて、もう一つ遠い所に居る他者……の人生をつかむということでもあります。コミュニケーションというのは、ただAとBがいろんなうわさとか……をつなぐだけの問題じゃなくて、ほんとうのコミュニケーションというのは、自分のごく周辺の隣人の意識を超えて、そして、さらに遠い他者の人生をつかむことができるということではないかと思うのであります。そういう資質と申しますか、根源的な非常に大切なものを鳴海英吉さんという人はこの『全詩集』の全作品の底部に備えているということがわかったわけであります。

しかし、それだけの資質を持つという鳴海英吉さんのそういう全作品がたくさん読者をそのコミュニケーションによって広がりを持つかという、そうではないというふうにわたしは考えるわけであります。つまり、そういうコミュニケーションの本格的なもの、他者の人生をつかむというふうなものを遮る、それを遮断するという人間の意識というのが働いているだろうと思うのです。そういうものはいったい何だろうかと。なぜそういうものを遮ったり、……人間の生きている真実の姿というものを拒否する、嫌う、そういうものがあるのだろうかということを常に思うわけであります。皆さん、それをひとつよく考えていただきたいと思うわけです。

それから、鳴海英吉さんの全作品を読んで最初に考えたことは、そのコミュニケーションの問題と、もう一つ「死地」。「死ぬ」、土地の「地」ですね。死ぬ場所——それを深く考えました。……つまり戦争に駆り出され、鳴海英吉さんは山東半島でいろんな遊撃戦みたいなタイプの一兵隊であったわけでありますけれども、そこで終戦を迎え、そしてシベリヤに送られる。そして最終的にはナホトカへ集結される。……そして命からがら日本へ帰って来るわけですけれども、その間に「死地」、つまり「死ぬ場所」というものに絶えず脅かされていたのではないだろうか、さらされていたのではないだろうか、というふうに痛切に想像するわけであります。

「死地」というのは、人間が生きていくうえにおいて常にそのことを考えるわけですがけれども、それは平和な日常のうえにおいてではなくて、そういう戦争という、戦いという、生きるか死ぬかのぎりぎりのところで生きている人間の「死地」ということでもありますけれども。しかしそれにしても、小さな小さな死であるわけです。それは大きな(笑)「死地」じゃない、大きな出来事ではない。

……しかしその死を考える時に、自分の小さな死を考える時に、今われわれは、平和な、この平和

呆ける日本でいろいろ追想して鳴海英吉さんのそういう状態を考えるわけですけれども。しかしそういう小さな死をぐり抜ける、それをひっくり返して生きていくという時に、いかなる人間の小さな死でも、その小さな死を利用する、利用している大きなからくりがあるのではないだろうか——と、このシベリヤからこちら側にあるそういう平和呆けをしている日本列島でそれを考えるわけであります。つまり、人間がいろんな状況に追い込まれて小さな死を遂げることでさえ「戦争屋」という者が居て、そこで利益を貪る。つまり、戦争であれ戦争の中の平和であれ、儲ける奴は儲けているんだと。利益を得ている奴は(笑)利益を得ているというふうにこちら側では思うわけでありますけれども……恐らくそういうことはあんまり考えられなくて、つまり、現地ではそういうことは考えられなくて、必死の思いで「小さな死地から死地」へ生き延びながら……鳴海英吉さんは日本の舞鶴に接岸したのだらうというふうに思うわけです。それはもう、想像を絶するものではなかったかと思うわけです。

それと同時に、シベリヤの集結の詩をずうっと読んでおましてわたくしがさらに考えたことは、ソビエト社会主義国がですね、シベリヤに限らずずうっと北極海寄りあるいはベーリング海、すべてヤクート地区における収容所列島、「収容所」という経済であります。「収容所経済」——つまりかつてソ連であったスターリン、フルシチョフ、その後二、三ありましてそしてブレジネフ、コスイギン、そして最終的にはゴルバチョフまでいくわけですが、その長い六十年、七十年かかった極東の収容所経済から、つまり人間をそこへ、政治犯とかいろんなもう犯罪者とみなす者を送り込んで、そこでほとんどただ働きのような状態で働かして、どれだけの利益を得たか。どれだけの利益を得て、そしてそれを中央のモスクワならモスクワに吸い上げたかということの計量化、それを明確に数字で表すということが必要なのではないかと思います。それをひよっとしたらかつてソビエトの中でもそれは数量化されていたかもしれませんし、その相手国であるアメリカがひよっとしたら秘かに資料化していたかもしれませんし。それをぜひとも知りたい。

つまり、中央諸経済が情報を公開することによって、収容所経済組織を崩壊せしめていく。権力強権でもってそれを転化していくのだけれども、情報公開によって根源的なものが思うようにいなくなる。よって次第にかつてのソ連が政治権力的にも政治的にもいろんな状況によって力を失っていくことになったのではないだろうか——ということにも考えが少し及んだわけであります。これはわたしなりに少しいろいろ勉強したいと思うわけです。

「小さな死地から死地」へわたる一人の文学性を持つ兵隊が、どこからそういうエネルギーができて、そしてその「死地」をぐり抜けて生き延びていったかという、これは非常にある意味ではすさまじい本でありまして。……ただ、細かいところにいろいろわたしなりにちょっと不満みたいなものもありますけれども、しかしこの鳴海英吉さんという人は、とんでもない人だったと。それと同時に、非常にすばらしい詩人だったと。あるいは、芸術家だったというふうにわたしは改めてここひと月ばかり考えておりました。

氣にくわないというところもあるのですが、それは鈴木比佐雄さんにもちょっと言いたいことなのですが……石原吉郎というやはり同じシベリヤ体験をした詩人の文章を読んで、「断念」とかいろいろありますけれども、『望郷の海』とか……鳴海英吉さんも鈴木比佐雄さんも、褒めているわけですね。しかし「鳴海英吉さんがある時石原吉郎のところへ近寄って行ったら、石原吉郎は何かそ知らぬ(笑)素っ気ない感じでそっぽを向いた」というふうに書いてありますけれども……しかしそれは「そっぽ向かれた」という(笑)ことの問題もありましようけれども、こんなものは石原吉郎の実体を最初から見抜いていなかったということであって、こんなものはたいしたことはない。いくら(笑)シベリヤ体験記を深刻に物語っていても、石原吉郎の言辞、言葉なんかにはたぶらかされるようではだめだとわたしは思うわけです。それはわたし自身が石原吉郎と付き合っってよく知っているし、最初から見抜いていますから。「人間を見抜く」ということを……書いたものだけで即断してしまうことは、こちら側の罪です。そういうところが若干の不満なところ……それは反論はあるでしょうけれども、むしろ石原吉郎を少し持ち上げた鮎川信夫、あるいは『荒地』の連中に少し哀れみを感じる(笑)ばかりのことであって、……騙されてはいけない。

つまり騙されるということは、われわれの日常書いている、つまり現代詩の歴史を繙いてもそういうことがあります、つまり、形而上学的な言葉を累積しながら詩を書いている或るモダニズムを、そういう詩人達の中に充分それは認められることであります。言葉というものは嘘をつくことができるわけです。もちろんその嘘がフィクションを形成し、そのフィクションの中から大きな真実を読者が得るぞと言うことはできませんけれども。最近の現代詩は、身辺日常詩とそして少しメタフィジカルなそういう言辭を弄するそういう言葉の累積が多いわけであります。

そしてわたくし共、わたしは『列島』の中の一末輩にすぎないわけであります。中心人物はここに今おります浜田知章だとか、それから関根弘だとか、木原啓允とか、御庄博実とか……今広島でウラン弾のいろんな研究を追究している御庄博実さんという人もいます。木島始は、先だって亡くなりました。関根弘も亡くなりました。しかしその並みいる『列島』のいろんな詩人達は、リアリズムとそれからシュールリアリズム的な人間の内部へ突き刺さっていくそういう思考能力、創造能力、そういうものをアウフヘーベンして、そして共に或るエネルギーをもつ。或る盛んなるものをもつ。或る非常に静かなる透視力、洞察力をもつ。そういうリアリズムと、そしてシュールリアリズムをアウフヘーベンして、それを前へ提示していくということを考えていたというふうに、ざっくばらんにわたしは今から言えると思います。その『列島』という集団がサークル誌からサークル詩人達を集めながら進んで行った過程の中で、そういう手法を採っていたように思うわけであります。

そして鳴海英吉さんは、それに相応しいそういうリアリズム……で、シュールリアリズム、シュールは非常に嫌いな感じはありましたけれども、そういうリアリズムで見える眼力というか、そういうものを自分の内部を通してもう一つ広いリアリズムで出していくということを、この詩の全編の詩の作品の中に常にあるわけです。しかしそれはわたくしは、今現に鳴海英吉さんのそういう持っている手法というのは、「シュール・ドキュメンタリー」ではないかと思う。つまり、もうリアリズムではなくて、ドキュメンタルなものを超えていく或る強いリアリズムではないだろうか、そういう原型ではないだろうかと思うわけであります。……そういうリアリズムにはいろいろな考え方もありましようし、そしてそれを内部へ通してもう一度強い激しいリアリズムに転化せしめていくということもいろいろルートはあるだろうと思いますが、いちばん基本線を鳴海英吉さんは辿っているように思うわけであります。だから単なるリアリズムではない。だから先ほどから申し上げているように、そういうコミュニケーションの問題、鳴海英吉さんから発信される読者へのコミュニケーションの問題、つまり鳴海英吉さんを他者として読者が直にその他者にふれていく、他者の人生にふれていく。そういうコミュニケーションを鳴海さんは発信していく。それから、小さな死地、死に場所というものを生き抜いていく。そして生き抜いていく時に小さな死を遂げた人間は、これは犬死ですよ！ 犬死だし、それはどんな兵隊であろうと犬死ですよ。しかし、その犬死を利用してメカニズムがあるということを……教えてくれる。ざっくばらんに極端に言えば、「戦争であれ、平和であれ、儲ける奴は儲けているんだ」ということを、その小さな死地を今現実を抱えてこの平和呆けている(笑)日本で生きていくわれわれは考えていかなきゃならないのです。

さっき芳賀さんがおっしゃったんですけど、いろいろ階級はあるだろうと。しかし階級差はあまり鳴海英吉さんは考えないで、……同じ目の高さ、視線で語っていた。その発言は非常に良い発言でありまして、よくわかるわけです。鳴海英吉さんはそういう考え方、そういう気分、そういう気持、そういうものを持っていた詩人であったかもしれませんが、わたしはこの鳴海英吉さんの『全詩集』を読んで、われわれが現実にも忘れていた問題があるわけです。それは……「階級の意識」ですね。つまり、世の中生きていくということに関して、人間の階級的認識、そういうものが現代人からだんだん喪失していく時に、階級的に目覚めなければならないということでもあります。自分がどういう階級に所属し、どう生き方をしているかということを実感するということでもあります。それは、われわれ若い時はそういうことは当たり前だったんです、そういう階級的認識というのは。しかし現代、二〇〇四年のこの日本的現実においてですね、そういうものはほとんど無いじゃないですか？ ……それは人間の心の奥底に、枢の中に眠っているのかもしれませんが。その「階級の憎悪」っていうやつですね。……やはり文学というのは、そういう階級的認識とその憎悪ということにも激しい芽を吹き出させる——ということを考えねばならないと思います。そうでないと、日常的身辺ばかりの詩を書く。

しかし、そういう日常的な身辺詩を繰り返し繰り返し書いてみると、そこに汚れが出てくる。汚れ。血の濁り。それに気づかない。……詩を書いている人間はね。だからそれが褻になる。つまり、晴れのそういう非日常的な世界へ、現代詩のそういう書き手のエネルギーというかそういう資質というかそういうものを乗り込ませていくことが必要ではないか。それはとりもなおさず、メタフィジカルなそういう言語ばかりをまるで積み木細工のように積み重ねて、まるでパズルのように操って、もう濁りきっている！ 今、現代詩は。よって、そういう晴れの非日常的なものを一発ぶち込んで、そして……鳴海英吉さんのように、わたしが言う「シュール・ドキュメンタリー的」なところに目覚めていく必要があるのではないだろうかと思うわけでもあります。

だから最後にはやはり、どうしても階級の意識、それが非常に喪失している時代がやってきている。現に現在のロシアでは、きのうのいろんな情報では、チェチンの方のテロによって大変な犠牲者が出たりして非常にプーチンは困っているようでございますけれど。しかしロシア全体は社会主義政権時代、特に非常に社会主義が高揚してそしてある種の豊かな平均値を出していたブレジネフ—コスイギン時代、もちろんブレジネフの後半期はソビエト社会主義圏は崩壊の一途を辿っていくのでありますけれども、ちょうどその頂の時ですね。現在のプーチン政権というのは、今のロシア経済というのは非常によくなってきて、ブレジネフ—コスイギン時代に迫りつつあるわけです。それはわたしの見る限りではプーチンの独裁、非常に(笑)厳しい独裁、そしてソビエトではかつての共産党、それ以外のところはもう無くなってしま(笑)のではないかと、その残党すらゴミのように掃き捨てられていくのではないかとというくらいの時が来ているわけです。……世の中の動きというのは、あっという間にそういう社会主義体制が崩壊し、そして市場経済が導入され、つまり修正資本主義のようなものが導入され、どんどん変わっていきますけれども、さらにそれが浮き沈みしながら独裁政権を強固にしつつある経済状況が良くなっていくという。もちろんそれは現在のロシアにおける石油資源ですね。エネルギー資源です。

そこで、じゃあ今ロシアの詩人達は、若い詩人達はいったい何を考え何を書いているんだろうかと(笑)。その情報も乏しいですけど、そういうふう思うわけでありませう。

さらに、アメリカのブッシュ政権が、きのうテレビで見ますと、ブッシュが「もうあと四年やらしてください」と。……そしてケリーという別の党の党首との争いになっているわけです。対立候補ですから。しかしブッシュもケリーも、エール大学という大学の「スカル・アンド・ボーンズ」というエール大学の卒業生のスカウトされた或るスカル・アンド・ボーンズ、変な……「骸骨と骨」という、非常にきわどいそういう秘密結社のこの一員、仲良しなのです。(笑)そういう秘密結社同士でアメリカの寡頭政治というかそういうのを操っている。

……………そしてその周辺にユダヤ人びいき、イスラエルびいきのいろんな金儲けをする関係者が居る。それがいろんな戦争を巻き起こしているわけです。つまり、イスラエルに肩入れするためにイラクを今やり、……その次に何が起こるかわかりますか？ その次にアメリカはどこと戦争するかわかりますか？ ……イランが予想されます。つまり、イスラエルに対して核ミサイルが届く国の一つひとつアメリカは殲滅(せんめつ)していくわけです。つまりこれは戦争ではなくて、戦争のいちばん厳しい「殲滅する」という皆殺し(笑)の考え方を持っているように思うのであります。

そういうふうな雰囲気の中で構成されている寡頭政治のアメリカの詩人達は、いったい何をしているのか？ 何を書いているのか？ 先ほどのブーチンの独裁の方に向かってロシアの詩人達は何を書いているのか？ アメリカの詩人は何を書いているのか？ ……例えば、EUならEUのフランス、ドイツ、イギリス、スペイン | | いろいろある。その人達も、各国の若い詩人達は、あるいは年老いた詩人でもよろしい、いったい何を書いているのだろう？ アラブの詩人もたくさん居ます。……いったい何を書いているのか？ そういう中南米、中近東、あるいはもっと辺陲(へんすう)の国々の詩人達は何を書いているかということ、じっくりと考えてもらいたいわけです。

そのような状況の中にわたしどもは生きつづけています。生きている時に、生きている瞬間瞬間に自分の魂を揺さぶってくれる感動的なものがほとんど無い(笑)わけですね。そういうふうにもうわれわれの神経が摩滅しているのかもしれないけれども、いい詩なんかできるわけがない。そのへんもすこし考えていただいて、今後の詩の勉強にさせていただきたいと思うわけです。

それで、わたしは今そういう感動が無いわけで、感動が無いので少し休憩をしておりますけれど、しかしやっぱり目配り、気配り——そういう世界のいろんな情勢というものを、詩人であると同時にそういう何というかな？ バックチャンネルというか裏情報というか、バックチャンネルをできるだけつかんで、そしてそれぞれの世界的な情勢をつかみながらそういう視野に立ちたいというふう考えているわけでありませう。

それで最終的に、鳴海英吉さんのこの一兵士として、一庶民として、いろんな顔を持っておられます。いろんな表貌(ひょうぼう)というか、表す顔、表貌(ひょうぼう)というのがありますけれども、基本的に流れその中に打ちとどめているのは、先ほど申し上げましたように、小さな死地や死んでいく場所でありませう。それをくぐり抜けてきた。そしてわれわれも、それぞれが現存(げんぞん)していて小さな死地を持っているわけです。しかしその小さな死地を他人に利用されてはならないということ。他者に利用されてはならない——そういうことを鳴海英吉さんから教えられることが充分にありませう。

……………戦争を考える時ですね、……戦争には準備段階、戦争する「戦争屋」というのが準備をするわけです。準備段階があるわけですね。だからその準備段階という、準備をしているということ。詩人は察知(さち)しなければいけません。だから、アメリカが今イラクを、フセインをやったと。そればかりに目を奪われていいはずがない。つまり「戦争屋」というのは、「次の戦争を準備している」ということを見抜かなければいけない。次の戦争の準備はどこと、何に対してやっているのかと、アメリカのそういう産業複合体というのかな？ 軍需産業というのか……それはイラクから予想される他の国へ大国の中における民族主義、独立の運動が勃興(ぼっけい)してくる。別の大国がその後方から石油エネルギー資源が欲しいために援助する。民族主義が利用されるわけですね。大きなテロリズム、小さなテロリズム、交錯しながら複雑な戦争に入っていくわけです。二十一世紀は明らかに挑発と消耗の時代に思

われてなりません。つまり、西暦二〇五〇年にはやっぱりアメリカと中国の対立関係というのは厳しくなって、その準備に、中国は戦争準備に入っていると。それは、わたしは妄想かもしれないけれども、直感です。そしてソ連は何かする、必ず何かします。

するとその時の、床屋政談ではないですけれども、日本はどうなっているかと。日本はどういうようになるだろうかと。アングロサクソン側につくのか？ アジアとしての中国の側につくのか？ いろいろ問題はありましようけれども、わたしたちの周囲もだんだん冬の時代がやってきました。社会的なそういう認識の上において、社会的な要素というものをテーマにして書く詩人というのは、だんだん何か無言の苦しみに遭っているような、そういう非常にわれわれの書く立場にとっては、まさに冬の時代がやって来つつあるわけであります。

そういう冬の時代になりつつある時代に鈴木比佐雄さんがこの『全詩集』を出してくれたということは、非常に素晴らしいことだと。つまり、この鳴海英吉さんの本一つを頼りにするわけではない(笑)けれども、これを一つの中軸にして、残酷な……………世間、残酷なそういう他者というものを確認する必要があるのではないだろうかと思うわけであります。

今日頂いた鳴海英吉研究会のプログラム、あるいは英吉研究会の全詩集出版記念会を再録したこの小冊子には、さっきずっと読んでいたのですが、それぞれ立派な非常にいいことが書いてありまして、わたしの今までの話は何もこの研究会のそういう小冊子を超えることはできなかったけれども…………わたしはこひと月ばかり鳴海英吉さんを考えて、そしてこれを軸にして、この寒々しい現実を突き抜けていく一つの刃(やいば)として、この鳴海英吉さんのわたしなりに考えたシュール・ドキュメンタリーという方法が非常に効き目があるのではないかと(笑)思うわけではありますが、皆さんどういうふうにお考えになるのか、期待して止みません。本日は社会的認識の上に乗ってどのように生きているのかのほんのスタートのところを概念的にお話したわけですが、お許しを願いたいと思います。

ちょっと時間が過ぎてしまいました。これで話を終わらせていただきます。大変ありがとうございました。…………(一同拍手)…………

鈴木比佐雄 どうもありがとうございました。

今のお話を聴かせていただきまして、非常に感銘を受けました。『列島』の精神の中には、反戦・平和、あと芸術革命、そしてあとサークル誌など、職場とか地域とかそういうところを通じて新しい共同体を、生き生きとした共同体を作っていくというような精神があったと思うんですね。あと、ご指摘のあったやはり「収容所経済」というものですね、あの当時は一千万人の収容者が居たのではないかとされています。そのうちの七百万はソビエト人、あとは二百何十万はドイツ人、そのうちの六十万とされているのですがもしかしたら百万人以上じゃないかとも日本の抑留者達が居たと言われています。そういうようなことを経済活動にしてやっているそういう残酷な他者がいるのだという、そういうふうには認識しなければならない。そういうような中で鳴海さんの詩もグローバルな視点でしっかり見ないといけないというご指摘を、非常に興味深くお聞きしました。このような問題意識をまた次の研究会でいろいろ参考にさせていただきたいと考えました。

あと五分ほど休憩して次の活弁とさせていただきたいと思っているのですが。ちょっと時間が無いもので、五分ということでよろしく願います。

◎第二部 その一 無声映画上映

『キートンの警官騒動』『瀧の白糸』

活弁士…万朶(ばんだ)るり子

その二 鳴海英吉の朗読映像放映

山中真知子 それでは第二部に入らせていただきます。鳴海さんは、徳川無声の先輩に当たる加川榮一の息子さんなんです。それで、伝統の話芸に幼い頃から親しんでいらして、楽屋でも徳川無声に可愛がられたとかそういう環境とか、お父様の血筋も受けていらしたのか、私は鳴海さんと昔から『鰐組』という詩誌でご一緒させていただいたのですが、話術がすごく巧みな方だってお声も素敵だっというのを知っていましたが、朗読だけはなぜか聴いたことがないのですが、同人雑誌の『光芒』の皆様が「鳴海さんの朗読はもうプロ級だよ」とか「素晴らしいよ」とかって、ぜひ聴いてみたいと思っていたら今回、田上悦子さんが鳴海さんの朗読なされたビデオをお持ちになって、この後皆さんにも聴いていただこう、観ていただこうと思って、今日はとってもラッキーだなあと思うのですが。そういう鳴海さんに因みまして、無声映画を本日上映させていただきます。

そして、今日の活弁士は万朶(ばんだ)るり子さんです。こちらの素敵な美しい方なのですが、万朶さんは千葉県松戸市のお生まれでして、かつての東京キネマ倶楽部で活躍なさっていらして、チャップリン、キートン、ロイドの古典など、和物では大河内伝次郎の『水戸黄門』、そして入江たか子の『瀧の白糸』、それから『忠臣蔵』や、なんかいろいろ幅広いレパートリーをお持ちです。そして普段、最近では松戸市民劇場の理事長さんもなさっていらっしゃるって、ご自分でお考えになったオリジナル講談『二十世紀ナシ・シンデレラ物語』——皆さん鳥取県が二十世紀梨の名産でよくご存知かと思うのですが、最初に発見された所は、原産地は松戸市なのですね。そこを万朶さんがオリジナルの脚本をお書きになって、松戸観光大使、それで鳥取親善大使で両県の橋渡しをなさっていて、その活弁の最後は、なんと私がいちばん感動したのは、尾崎翠の詩を最後にお読みになって、わたし尾崎翠が大好きなんです、それですごく何かうれしく思っています。今日も素敵な活弁を皆様にご覧いただき、じっくり味わっていただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。……(一同拍手)……

万朶るり子 皆さんこんにちは。万朶るり子でございます。今日はほんとうにもう博物館行きの無声映画、活弁をお楽しみいただきしたいと思います。

日本に映画が入りまして百年過ぎました。無声映画の時期というのは大変短くて、明治三十九年に映画が入ってまいりましてからその後四十年間ほどの期間しか無声映画の期間がございません。残念ながらもちろん鳴海さんのお父さんのことはわたくしも存じ上げてないのですが、無声さんよりもさらに昔ということで、おそらく明治の終わりから大正の初めにかけて活動なさった方じゃなかなと思えます。いろいろ資料は調べてみたのですが、今現在ちょっとわかるまでは至っておりません。といいますのは、何しろ震災がありまして、戦災がありまして、それでトキーがありましたから、もうほとんどフィルムというのはあちらこちらに分散してしまっていて、もちろん弁士の方がどんなふう活動していたかということも全くわからないような状態です。

現在どのくらい弁士が居るかといいますと、これは弁士というのは日本だけのことでございますので、三十名ほどおります。最近若い方も増えてまいりまして、最近では新しい無声映画の作品も作られたりしておりますけれども、とにかくやらせていただける、上映させていただく機会というのは少ないんですよ。今司会の方がご紹介して下さいました「東京キネマ倶楽部」という所で三年くらい前でしょか鶯谷に専門館ができて、一年間そちらで無声映画を上映すると、われわれ弁士の間では「すぐつぶれるよね」って言ってましたら、まあどうにか一年保ったということですが。もう今はそういう所はございませんので、こういうような機会と呼んでいただくと上映するということになっております。

それで今日の作品でございますけれども、おそらく、そうですねえ……調べて加川さんがどういうのをやりになっていらしたのかなあと、わかればそれとと思ったのですが、それがわかる手だてが無いものですから、今日は洋物と和物と二本立てでやらせていただきます。それで、わたくしの持っている作品の中ではだいたい一時間のものが多いのですね。それで一時間観ていただくというのはちょっと大変なものですから、短いものを持ってまいりました。

最初にご覧いただきますのは、キートンの作品です。無声映画といいますと、たいがい「チャップリン」と言われるんですね。チャップリン、ロイド、キートンというのが三大喜劇王なのですが、キートンはその三人の中でもいちばん都会的な感じ、都会的なセンスを持った役者さんです。ストーンフェイス(表情は変わらない)ということで、大変現代のコメディーに通じるところがたくさんございます。無理に笑わせようというような作為が見られない作品です。また、日本では増田キートンさん、あの方がバスター・キートンから名前をとっているということでも有名でございますね。今日ご覧いただきますのは、大正十一年の作品です。一九二二年ですね。……その辺のお生まれの方、いらっしゃいますか？ あっ、リアルタイムで無声映画はご覧になった方はいらっしゃいますか？ ……(浜田知章氏 拳手)……ご出身はどちらでいらっしゃいますか？

浜田知章 一九二〇年生まれです。

万朶るり子 あ、二〇年ですか？まあ！二歳でご覧になった？浜田知章(マイクが届かず聴取不可・以下同)

万朶るり子 え？森光子さんと同年ですか？(浜田氏発言)……お幾つの時？十七歳の時？じゃあ向こうの方も十七歳だったわけですよ。…(浜田氏発言)…そうですね、そうですね。はい。…ということで、森光子さんと同年だということで。わあ！これからもますます、向こうの方も、舞台の上ででんぐり返しができるほど…(浜田氏発言)…そうですか。まあ、うれしい方が前の方に座っていただいております。

その懐かしさをどこまで再現できるかどうかわかりませんが、まずは一本目はキートンの『警官騒動』をお楽しみいただきます。

わたくし万朶るり子の活弁にて、しばしのご高覧の程、よろしくお願い申し上げます。……(一同拍手)……

【警官騒動】

(| | 軽快な音楽)

——キートンの警官騒動。

——世紀のマジシャン、フーディニーが言っている。

「愛は鍵屋をあざ笑う。どんな鍵をもっても彼女の心の扉は開かない」。

| 彼女は言っている。

「さよなら。あたし、お金持ちが好き！」「あなたが立派な実業家になったら、デートしてあげるわ」

「じゃあね！」

| | 何と冷たい！ しかしこれが現実。この町の市長のご令嬢に振られたキートン君、あてもなく町のなかへ。

☆

——さて、こちら見るからにお金持ちの紳士。

「あれあなた、もしもし、財布を落としましたか？」

「中身取ってないだろうな？」

「変なこと言う人だなあ」

☆

「ああ、ああ大丈夫ですか？ ああ、ああ」「あつ、ちょっとわたしに乘らないで、タクシーに乗ってくださいよ！」

「余計なことするな！」

☆

——せっかくの親切も無駄になるかと思いきや……財布はキートン君の手の中に……。

「ん？ おっ！ さ、財布が無い！ 引き返せ！」「中身がない……引き返せ！」

——何と間抜けなこの紳士……実は警察官であります。

☆

「あ、ここでいいよ。幾ら？」「あ、そう」……「ん？」「お釣りはね、要らないよ」

「あの若造、ずいぶん持っていやがんなあ……」

☆

——ここに引越して大わらわの家族がおりました。

「大至急運送屋に来るように電話をかけたから、すぐに来るだろう」

「よし、あの荷物を利用して金を巻き上げてやれ」

——男は一計を案じた。

(男、泣くそぶり)「あーあんあんあん。何てことだ！ あーあんあん。あまりにひどい。誰か聞いてく

ださい。ああ、あーん。ああちょっと旦那、聞いてくださいよ。あーあんあん。かくかくしかじか、私の会社がつぶれてね、荷物ごと放り出されてしまったんですよ。聞くと涙、語るも涙。ああ、この家財道具でも売らなければ、私の愛する妻や子が飢え死にをしてしまうんですよお～～」

「ああそうですか。では私が、このお小遣いで」「どのぐらいあったらいいですか？」

(男、泣きながら)「あーあああ、はいはい…はいはい。……はい、これおつり。ああーありがとう。命の恩人ですよ、助かりましたああ……(このとんま野郎！)」

☆

「やあ、買ったはいいいけど、どうやって運ぶかなあ？ うん……五ドルしか残っていないし。ああ！あの馬車が五ドルか。これで買えるな」……「ああもしもし。ああ五ドルね。はい。馬車、五ドルでもらっていくよ」

「ええっ？」

——どうやら馬車の値段ではなく、上着の値段だったようです。

「いらっしやいませ。はい」「んん、何だかわからないけど、儲かっちゃったなあ」

——どうやらこの男、馬車の持ち主ではなくここにただ座っていたルンペンでありました。……自分がこの荷物を買い取ったと信じて疑わないキートン君……

☆

——一方こちらの旦那、てっきり運送屋が来たと思い込んでいる家具の持ち主であります。

「あれ？ 見も知らない人が何て親切。ふーん、運んでくれるの？ はあ。あつ、えっ？ これも？ うん、これも。じゃ、これも」「何と、家族総出で手伝ってくれるのか、ありがたい」「じゃ、まあ座って見ていよう」……「やあ、ご苦労、ご苦労。助かったよ」

「すいません、これもお願いしますね」

「ええ？ こんな小物は要らないんだけど。うーん」……「ええ、これも！」……「あーあ、まあいいか」

「これが引っ越し先だよ。よろしく」

「何だって？ 僕がどこへ行こうと勝手だろう！」……「はい、これで僕も実業家の仲間入り。どんなもんだい！」

☆

——左へ曲がりまます。

「あいたたたつ」……「ああ、いいものがあった」

(犬の鳴き声) バウ、バウ！ バウ、バウ！ バウ！

「ああー。よし、ではこのハンガーを細工して」……「これをつけてと」

——左へ曲がりまます。

「ううんん、上出来！」……「はい、ドウドウドウ」

——左へ曲がりまます。

「おお！ ドウドウドウ、ドウドウ。おお、どこへ行くんだよ？ オオツ！」

——左へ曲がりまます。

(情けない声で)「ああ、ああ、行けない！ ウウ、ウウ。いったい何に殴られたんだかわげがわからん」「ドウ、ドウドウドウドウ」「ああ、なかなか言うことを聞かない馬だ。うーん、ん。駄目だ、こりゃ。馬に任せるとするか。任せたよ！」「ちよつくら寝てようかね。はい、お休み……」「あれ、どうしたの？ こんな所で止まって」「ふーん、聞こえないの？」「では、文明の利器を応用して」……「もしもうーし、出発進行！」

——家具はキートン君を乗せてのんびりお散歩です。

☆

——さてこちら、家具の持ち主。とつくに引っ越し先に着いております。

「おかしいなあ。あの運送屋、スピード違反で捕まったのかもしれない……」

☆

——さて、今日は年に一度この町の警察隊のお祭りであります。礼服に身を包んでのパレード。大勢の人達が見物に集まっています。右を見ても、左を見ても、ポリス、ポリス。町中はポリスの山！

「はい、ドウドウ。真っ直ぐ進めよ」

「嫌だよ！」

「真っ直ぐ進めたら！ なぜ行かないの？」

「前は嫌なの！ 今日はね、お巡りのパレードがあるんだよ。こんなに積んでたら、重量オーバーで捕まっちゃうよ」

「ほら、行けたら！ ドウドウドウ！」

「知らないからね。行くけど、責任取ってよ」

☆

——貴賓室には町の名士が呼ばれております。

「お会いできて光栄です、市長のお嬢さん」

——何と！ それはキートン君の憧れのご令嬢。次々と警察隊のパレードが進んでいくなか、おおっと！ 何を間違えたのかキートン君と馬車の登場です。

「ほらね、旦那。だから言ったでしょう？ パレードの中に入っちゃうから嫌だって。もう知らないよ、ほんとうにイ」

☆

「まあ！ あれは何てこと？」

「けしからん！ パレードの邪魔をしおって。ううん、逮捕してやる！」

「いやあ、どうも」「あらっ？ こちらも……」「うーん、いい気分だ」

—その時、暴漢がビルの屋上からパレード目がけて爆弾を……

「うん、無い。無いなあ。無い」……「ん？ あ、ちょうど良い。ちょっと拝借」

「まあ！ ひょっとして爆弾じゃないかしら？ キャーツ！」

「ん、ん？ 何だって！ ああ、いいや」

—ドカーン！

「ん？ 何だ何だ、どうした？ テロか？」「ああ、馬車に乗っている男が犯人だ。あ、捕まえろ！
すぐに捕まえるんだあ！」……「ああ、どっちへ行った？ あ、あいつはどこだ？」……「ああここか？
あ、いないぞ！」「早く見つけろ！」

☆

—貴賓席も大混乱であります。……なぜか二本の傘。現れたのは、我らがキートン君。

「あっ、あそこに居るぞ！」……「あっ、大変なことになってしまった。すぐ警官を呼ぼう」

「あの、いや、私たちが警官ですから」

「では、その警官を守るための警官を早く呼びなさい！」

—とにかくキートン君のために町中上を下への大騒ぎとなります。

「どこだ？ いないぞ！」……「どこ行った？ 捜せ！」

「ゴミバケツの中ですよお、はっはー」……「おおっと来た！」

☆

—さてこちら、家具の持ち主。

「わしの家具はどうなったんだ？」……「あちよっと見てくるよ」

—何と！ この人も警察官であります。

「こっちか？ ああこっちじゃない、あっちだあ！」

「どっちでもないよー」……「おまわりさん、ご苦労さん！」

「どうしたんですか？」

「爆弾テロの犯人だ！」

「おお、そうか！」

—変装したつもりのキートン君。しかし警官の数もどんどん増えてまいります。

「おおっと、逃がさんぞー！」

「ありや、これはもしかしてわしの家具ではないか？ なんと！」……「くそお、この運送屋め逃がさんぞオ！」

「どうも！」「さよなら！」

—横町から横町へ……路地から路地へ。

「へえーい、タクシー！」……「よし、このはしごを使って、おっと、トトトオ。ごめんなさいよー」
——キートン君、絶体絶命……

「ああ集まれ！ あそこに居るぞ！」

「まずい、大勢やって来た」「それならこれでひとつ飛びー」

——ピューン。

「あぁと！ ごめんなさい、大丈夫ですか？」

——キートン君、ぶつかったのは財布の持ち主の警官。ああ最悪！ ……警察官が五倍、六倍、十倍、百倍にふくれ上がりました。……しかしなぜこんな大勢で捕まえられるのでしょうか？ ……次から次へとビルの中に吸いこまれていく警察官。ビルの中は満あん杯、巨大な犬小屋であります。そして一人出てきたのは、我らがキートン君。

「あっ、お嬢さん！」

「フン！」

——あっけなくまたまた振られてしまいました。はあ～あ。全てに絶望した彼は、再び警官の待ち受けるビルの中に身を投じるのでありました。

キートンの警官騒動、ジ・エンド……

……(一同拍手)……

万籟るり子 これが洋物のいちばん短い作品でございます。

もともと弁士というのは日本だけのものでございますので、あちらの場合ですと最初に解説者が出てまいりまして「こういう作品ですよ」ということを簡単に説明して、あとは想像力で見ていただくところですが、日本の場合ですと、皆さんのパンフレットにもございましたように、長らく話芸というものがございました。それで、その講師の方たちが多く無声映画の弁士になられることが多かったんですね。それで講話の口調と無声映画の口調というのは大変似ております。これから和物をご覧いただけますが、それに多く特徴があると思いますので、お楽しみいただけるのではないかと思います。わたくしも講話の勉強をいたしておりました時に無声映画の方にスカウトされて、そちらの方に入ったというわけでございます。

これからご覧いただけますのは、昭和八年、もう無声映画も最後の頃の作品です。岡田時彦、それから入江たか子主演の『瀧の白糸』、このミニチュア版、短縮版を今日はご覧いただけます。じっくり見ていただけますと一時間半かかるので、いいところだけ今日は選んでご覧いただけます。ただ、短くても作品に何ら問題はございません。たっぷり無声映画の世界、お楽しみいただけるのではないかと思います。

それでは、後半の方は泉鏡花原作『瀧の白糸』、お楽しみいただけます。

【瀧の白糸】

(| | 音楽)

——溝口健二作品『瀧の白糸』。

主演は、瀧の白糸・入江たか子、村越欣弥・岡田時彦でございます。

——ここは金沢浅野川のほとり。たくさんのお見せ物小屋が並ぶ中に、ひとときわ景気の良いのが水芸瀧の白糸一座の掛け小屋。

「さあいらっしやい、いらっしやい！ 評判、評判！ 評判の水芸は瀧の白糸一座。さあいらっしやい、いらっしやい！」

——大変な人気でございます。近郷近在から集まって来る人々で小屋の中は毎日毎日大入り満員。……その楽屋で、化粧を終え衣装を着けて舞台の出を待つ瀧の白糸。……何やら楽しそうな思出し笑い。

「何をニヤニヤ笑ってるんですよ、太夫。何かいいことでもあったんですかい？」

「そうよ、とてもいいことがあったの」

——北陸第一の美人と評判の瀧の白糸の華やかな水芸、言い寄る男は数え切れないほどでしたが……男嫌い、男勝りの勝ち気な性格で、水芸の華やかさとともに人気はますます上がるばかりでございます。

「よっ、待ってました白糸！ 日本ーイ」

——鮮やかな芸、そして白糸のまばゆいばかりの美しさに、客は手を打ち足を踏みならしての大喝采でございます。……夕方になっても、人々の群れは掛け小屋の周りを行ったり来たり。ろくろっ首やら娘手踊り、覗き絡繰りにお化け屋敷、夏のひとときを楽しんでおります。

——だが、とつぷりと日が暮れると、さすがにざわめきは消え人の行き交いも絶えて、掛け小屋暮らしの芸人達もそれぞれの夜を迎えます。……暑い夜でありました。あまりの寝苦しさに、フラリと起き出した白糸、浅野川の川べりからふと橋の上を見ると、何やら人の影。

「誰かしら？ 木戸番の新公かしら？ しょうがないねえ、また酔っぱらって寝てるんだわ」「ああ、夜の川風って涼しくっていい気持！」「あら、新公じゃないらしい」……「おや？ どこかで見た顔……」「ああ、あの時の別当の欣さんだあ！ まあ欣さんだよお」「夜露は身体に毒ですよ。こんな所で寝ていると風邪をひきますよ」「まあ可愛い顔してねていること。ねえ起きなさいよ、起きてくださいよお」「今日の昼間、楽屋でこの人のことを想っていて、一座の亀さんに冷やかされたけど、今夜こんな所で逢えるなんて、縁があるのかねえ」……「まだ起きない。気持ちよさそうに寝ているわねえ」

「ん？ ……ああ。毛布を掛けてくださったのは貴女でしたか？」

「うれしいわ、こんな所でまた欣さんと逢えるなんて」

「どなたでしたか？ いっこうに存じませんが……」

「情無しなんだねえお前さんは。わたし、あんたを忘れやしないよ。ほら、思い出しておくれよ。わたしが高岡からあんたの馬車に乗った時、人力車と駆けつくらして、石動からあんたの腕に抱かれて馬の相乗りをした女さあ」

「ああ、あの時の！」

「言われるまで思い出さないなんて、薄情だねえ」

「いや、薄情というわけではないが。わたしは馬車に乗って働いている男だ、毎日何十人と乗せる客をいちいち覚えてはいない」

「あら。ねえ、だけど馬車を捨てて途中から裸馬の相乗りをした女なんざあ滅多にいないでしょうよ？」

「そんなこと、毎日あってたまるか！」

「……ねえ、自分ばかり煙草吸ってないで、あたしにも一服おくんさいよお」……「あああ一、羅宇にヤニが詰まって煙管に息が通りやしない。無精な人ねえ」……「でも、無精な人も情婦の一人や半分はあるんでしょう？ ねえ、好い女がいるんでしょう？」

「そんなもの、いやあしない！」

「じゃあ、無いの？」

「いない」

「ほんとに？」

「ほんとだよ。くだいなあ君も！」

「あっ、背中に、背中に……」

「どれ、こつちに背中を向けなさい」「ああ、大きな蛾だ！」

「どうもありがと。親切ねえ」……「ねえ、それであんた、馬車にはもう乗らないの？」

「あの時あんたにそそのかされて、あんな乱暴をやって人力車を馬で追い越したまでは良かった

が、お陰であの翌日、会社から解雇されてしまったよ」

「まあ、それじゃああたしのために？ ……ごめんなさい」「それであなた、これからどうするつもり？」

「どうするって、とにかく食って行かなければならない。金沢の町は大きくて、軍隊もあって士官がたくさん居るから、別当の口でもと思って探しに来たんだ」

「それで、働くところはありませんか？ あたしみたいな女がこんなことを言っちゃあ生意気だけど、お前さんは別当なさる御人体(ごにんてい)じゃないねえ」

「生まれからの馬車引きではないよ。私は金沢の士族の家の生まれだ。三年前に父が死んだ。そのために学問を途中でやめたんだ。その上おとし母親も死んでしまって、今はもう天涯の孤児だ。食うために馬車会社に住み込んで御者となった。だけど、だけど私だって、このまま別当で一生を終えるつもりはない。目的も望みもあるんだ！ だが、儘にならないのが浮き世の常だ」

「そうね、儘にならないのが浮き世ねえ」

「今は自分の運命をあきらめているんだ」

「あなたの望みというのは、学問のことでしょうねえ？」

「ああ。法律という学問の修業をしたいんだ」

「ねえ、それだったら、金沢に居るよりも東京へ出て行った方がいいんじゃないかしら？」

「行きたいさ。だが……」

「じゃあお行きなさいな、東京へ。ねえ腹をお立てになっちゃあ嫌ですよ、失礼だけど、あたしが貢いであげようじゃありませんか」

「何を言うんだ、縁もゆかりも無いあなたに！」

「今ここであたしの心を受けてくだされば、それがつまり縁というものになるうじゃありませんか。……ねえ、後生だから貢がせてくださいよ。しがない旅回りの芸人だけど、お金に不自由はしちゃうお前さんのさ。あなたが立派に出世なさるまで、どうか私に貢がせてくださいな」

「そりゃあ……本当ですか？」

「本当ですとも！」

「せっかくのお志、お言葉に甘えて御恩に与ります。わたくしは村越欣也というものです」

「嫌ですよ、改まって。あたしは水島友、二十四よ」

「わたしは、二十五歳です」

「まあ一つ違いねえ。ああ……」
「ここに三十円あります。このお金で一日も早く東京へお発ちなさいな」

「この御恩は、終生忘れません。将来わたしがいかなる地位を得ても、命にかけて御恩に報います。それで、あなたの希望を言ってください」

「(笑)あら、あたしはあなたの希望が叶いさえすれば、それで満足」

「いけません！ それはただ恩に対する我が身の義務というもので、決して恩人に対する義務ではない」

「それじゃあ……言いましょうか？ ……あたしの望みというのはねえ、お前さんに可愛がってほしいのさ」

「えっ、それは……」

「嫌なの？ あたしが嫌い？」

「そんな……」

「この楽屋に今夜はあたし一人しか居ないの。ねえ欣也さん……」

|| 熱い情けにほだされて、命が燃える浅野川川べりの小屋。聞こえるのはせせらぎの音ばかり。運命の一夜が明けました。……今しみじみと小屋の外に立ち、女芸人瀧の白糸の絵看板を眺めている村越欣也であります。

「そんな絵看板を見ては嫌！ 絵看板ではしがない水芸の瀧の白糸。でも、お前さんとこうして一緒にいる時は、あたしは堅気の水島友さ」

——こうして欣也は法律の勉強をするために金沢を離れ、東京へと向かいます。

「勉強のためのお金はどんなことをしてもあたしが稼いで送りますから、安心して学問に励んでね」

——だが、所詮は浮き草暮らしの旅芸人。瀧の白糸の人気に不吉な陰が忍び寄ってきます。北陸と東京に離れ、互いに違う道を歩む男と女の運命はいかなることに相成りましょうか？ 映画後編へと続きます

——北陸第一の美人と評判の高い瀧の白糸も、所詮は旅回りの芸人。いつしか人気は落ち目となり、約束した欣也へ金を送ることも次第に苦しくなっていたのであります。だが、愛しい欣也にどうしても金を送りたい。その一念で白糸は、高利貸しの岩淵剛蔵の家を訪れたのであります。

「何だと？ ふふ、三百円貸せだと？ 貸してやろうじゃないか。その代わり、覚悟はできているだろうな、ん？ 白糸、さあこっちへ来い！」

——そして二時間が経ち、しっかりと金を胸に抱いて岩淵の家からの帰り、後からつけてきた男がいきなり提灯を奪って逃げてゆきます。暗がりの中に立ちふさがった大きな男。

「おい、金を出せ！」

「誰だい？ お前達は……誰だい？」

「おめえの懐には三百円あるはずだ。さっさと出しやがれ！」

——いつの間にか五、六人の男に取り巻かれ、殴る蹴るの乱暴。そして白糸のふところから三百円の金は奪われてゆくのであります。

——氣を失っていた白糸の頬に夜露が降りて冷たく濡らします。

「畜生！ 金を奪ったのは、岩淵の手下の奴に違いない。あいつらみんなグルなんだ。何という汚い男！ 岩淵の畜生！ ……欣也さんへ送る大切なお金、死ぬより辛い思いをして手にした金を、このまま盗られてたまるものか！」

——拾った出刃をしっかりと握りしめ、無我夢中で岩淵の家へ引き返したのであります。

「あのお金を取り戻して、東京で勉強しているあの人に早く送らなければ……。どこに居る？ 岩淵。汚い奴！ 金を返せ！ どこに居る、岩淵！」

「ああふっふふ、戻って来たな、白糸。待ってたぜ！ おめえが戻って来るのは俺の筋書き通りなんだよ」

「返せ、わたしの金を返せ！」

「ゆすりだな？ てめえ！ この岩淵剛蔵様を貴様、ゆする気か！」

「三…三百円返せ！」

「うるせえ、おめえはもう俺の女だ！ こっちへ来い！ もう一度かわいがってやる」

——その時、白糸の持っていた出刃が抱きついてきた岩淵の脇腹を！

「うわああ……強盗……強盗だあ……」

——腹を押さえ、血だらけになって倒れる岩淵剛蔵……

「はっ……ああ……殺してしまった。岩淵を、岩淵を殺してしまった……」

——だが、今の白糸の心は、欣也へお金を送ることでいっぱいだったのであります。机の上の金に目をやると、思わず両手でかき集めふところの中へねじ込んで、岩淵の家から逃れて行く白糸であり

ました。

「早く、早くこのお金を東京に居るあの人に送らなければ……早く、早く！」

——そして、ようやく戻ってきた水芸一座の小屋の中。夜の風がテントの上を吹き抜けてゆくわびしい音を耳にした時、今取り返しのつかない恐ろしい罪を犯してきた自分に気がつくのでありました。

「ああ、あたしは人を殺してしまいました。金のために人を殺した。恐ろしい罪人になってしまった……」

——《高利貸し岩淵殺し 水芸の大夫瀧の白糸逮捕さる》

金沢の町中は床屋でも風呂屋でもこの話でもちきりであります。

——牢獄へと送られていく白糸。だが、堅く口を閉ざして岩淵殺しを白状いたしません。思うのはただ一つ、東京に居る恋しい男のことばかり……

——《岩淵殺しの公判近日開かる 東京より新任の検事代理が赴任して辣腕をふるう》

「ありゃあしかし驚いたなあ。あんな好い女が人を殺して金を盗るなんてやあ」

「なあに、いくら好い女だって旅回りの芸人だ、俺達の知らない所で何をやってるかわかったもんじやないよ」

「こら、うるさい！ 黙れ、何を言うか貴様ら！ 瀧の白糸が人を殺してたまるものか！ あれは好い女だ、誰が何と言おうと好い女だ！」

「うーん何々？ おお！」「いいかお前達、聞けよ。《東京から新しい検事がやって来て、瀧の白糸を裁く》？ うーん、こんな若造に大切な人殺しの裁判が任せられる……ハアック、ハックション、ハアックション！」

「ほらほらご隠居、そんなにいつまでも裸で怒鳴っていたら、風邪をひきますよお」

「白糸は無実だ、無実だに決まっておる！」

——牢屋の中につながれていても思うのはただ一つ、愛しい男のことばかり……

「ごめんなさい欣也さん、あんなに約束したのにお金を送ることができなくて。さぞかし東京でお困りになっているに違いない。お許しください……」

——今は木枯らしの吹く寒い冷たい冬だけど、熱い想いで結ばれたあの浅野川のほとりの懐かしい小屋の中の夏の一夜。その思い出にふける白糸。そして夢の中でいつしか欣也の妻となり、生まれたびかりの赤ん坊を抱いて、静かで温かい満ち足りた夫婦の暮らしを夢見るのでありました。

「おい、起きろ！ 二十七号、起きるんだ！ 新しく赴任された検事殿がお前に会いたいと申されておる」

「検事殿、二十七号を連れてまいりました」

「ご苦労でした」

——看守が去って白糸だけが残ります。

「……お掛けなさい、水島友さん……」

——その声に聞き覚えがある。ハッと顔を上げた白糸。ああ……夢ではないか！ あの愛しい欣也の姿が目の前にある。立派な、いかめしい検事の姿で。そして今、自分は罪人の着物を着せられた惨めな姿。何という皮肉な運命の巡り合わせでありましょう。あまりのことに言葉は出ない。悲しみの涙だけが後から後から白糸の頬を伝って流れ落ちる……

「(こんなにもやつれてしまった女の姿、ここまで追いつめてしまったのは自分ではないか。この女の苦労も考えず東京で学問に耽ってばかりいた自分は、何という無慈悲な男か……何という情け知らずの男か！)……眠れますか？ ……食べ物はどうですか？ ……わたしがこのように出世できたのも、あなたの親身も及ばぬお力添えのお陰です」

「……………ご立派にご士官なすって、おめでとう存じます」

——恋しい男にすがりつきたい白糸。だが、それが許されない罪人の自分……

「永い間、苦労をおかけしました。さぞ虫のいいやつだと、お恨みでしょう」

「ただ一目お逢いしたいばかりに、生き長らえてまいりました」

——そして今、こうして欣也に逢えたからにはもう思い残すことは…

「私は人殺しです、調べてください。お願いします。調べてください！ 検事様！」

「大恩人のあなたを調べることなど、できるものですか……私には、あなたを裁くことなんか、できません！」

「時間が参りました。二十七号を牢屋にもどします」

「私は岩淵剛造を殺して金を奪いました」

——すべてを自白した瀧の白糸は、この法廷で舌を噛み切って自殺を致します。そして又、村越欣也も、あの思い出の浅野川のほとりで、ピストル自殺をとげたのであります。

昭和八年、溝口健二監督の新派大悲劇、泉鏡花原作『瀧の白糸』全巻の終りでございます。

【第二部—二 在りし日の鳴海英吉氏の朗読映像を放映】

資料提供＝田上悦子氏

鳴海英吉氏による詩「虹」「さよなら」の朗読

山中真知子 時間がありませんので、第三部にすぐに入らせていただきます。

◎第三部 朗読…武力也、 三味線伴奏…米沢希英

山中真知子 続きまして第三部は、津軽三味線の演奏をお送りさせていただきます。演奏してくださるのは、パンフレットにありますご本名米澤希英さんと澤田成十朗さんです。そして、続いて鳴海英吉さんのお作「五月に死んだ ふさ子のために」の朗読を、武力也さんが三味線の調べにのせてご披露いたします。そしてラストはもう一回、三味線の独奏で締めくらせていただきます。

津軽三味線演奏者の澤田成十朗さんについて、皆様にちょっとご紹介させていただきます。ご本名は米澤希英さん。一九七八年、野田市にお生まれになりました。幼少の頃より民謡の細三味線をお父様に手ほどかされたのが三味線との出会いでした。中学時代から津軽三味線を習い始め、「津軽三味線全日本競技会・あいや節部門」の優勝、その後数々の賞を受賞なさいました。二〇〇二年には東京芸術大学音楽学部を卒業なさって、現在は海外も含め各地で演奏活動を行っていらっしゃいます。

また、本日鳴海さんの作品を朗読して下さる武力也(ぶりきや)さんですが、秋田でお生まれになりまして、現在船橋で息子さんとブリキ屋さんを開業なさっていらっしゃいます。「詩のボクシング」などにも出場なさって、山形の大会では米俵一俵おもらいになりました。様々な場所で詩の朗読に力を入れて大活躍中です。詩人で民謡研究者でもいらっしゃる佐藤文夫さんのお言葉によりますと、「郷里秋田の血を受けた武力也さんの肉声と、その背後に地吹雪のように波のように寄せては引いていく津軽三味線の音色との絶妙な詩的世界を、ぜひ皆様で味わってください」ということです。

それでは、詩と三味線のミニコンサート、約二十分間どうぞお楽しみください。

朗読 武力也(ぶりきや)「五月に死んだ ふさ子のために」

津軽三味線演奏 米沢希英(のりひで)

(米澤氏による津軽三味線演奏。途中から演奏をバックに武力也氏のトーク)

武力也 鳴海さんは、ほんとうに、女性には優しくかった。「もてた」と、さっき鈴木比佐雄さんが言いましたけど、もてたのか？ 優しくかったのか？ 女性には優しくかったけれども、わたしなんかは、後ろから来ていきなりゴツン！ と拳固よ。それから「ブリキ屋！」……。五十歳ぐらいになってゲンコツを食らったのは、鳴海英吉さんだけです！ 親にだってそんなことはされなかった。ほんとに、女性には優しくかった。だから、女の人の出てくる鳴海英吉の詩は、やはり艶があります。大好きですね、女の人が出てくる詩。わたしは千葉で、鳴海英吉も千葉。同じ肉体労働者。詩の中にもありますが、板金屋をやっていたことが。戦後の混乱期にいろいろな仕事を彼はやっておottみたいですよ。いろいろ話も聞きました。

彼の女性親は、やはりこの「ふさ子」に描かれているのではないかと思います。

「五月に死んだ ふさ子のために」……鳴海英吉。

(三味線の演奏をバックに武力也氏による「五月に死んだ ふさ子のために」の朗読・略)

武力也「五月に死んだ ふさ子のために」でした。詩は終わりますが、このあと三味線がまだ続きます。この素晴らしい演奏をどうぞ。

（津軽三味線演奏続く）

山中真知子 演奏と朗読、どうもありがとうございました。では、これで次は三部に移らせていただきます。五分ほどちょっと休憩させていただいて、続いてシンポジウム「井戸端会議」に入らせていただきます。

あと、本日鳴海さんの全集を六千円のところ特価で五千円で販売しておりますので、もしよろしかったらお求めいただければ大変ありがたく存じます。

では、休憩に入らせていただきます。

◎第四部 シンポジウム「鳴海英吉を俎上に

——その多彩な魅力に迫る井戸端会議」

コーディネーター……大掛史子

パネラー……水崎野里子、鈴木文子、山本聖子、
玉川侑香、岸本マチ子、田上悦子

大掛史子 追加料金を払うようにと今エメールの方から言われてしまいましたけれども、まあ追い出されるまでちょっと(笑)、少しの時間を「井戸端会議」ということでやらせていただきます。わたくし、司会の大掛史子でございます。

ここにお並びの方々、ほんとに皆さんもう有名人ばかりで、「おかみさん詩人勢揃い」という感じでございます。ちょっと簡単に鳴海さんとの接点だけ紹介させていただきます。

まず、いちばん遠くからいらした、沖縄からいらっしゃいました岸本マチ子さん。鳴海さんが岸本さんの『ヒミコ』という詩集をもう大好きで、「おれもいつか『ヒミコ』みたいなのを書けからな」っておっしゃっていたくらいで、そういう方です。ほんとにひと言ずつですけれども。

それからその次に、神戸からいらっしゃいました玉川侑香さん。玉川さんはもう、鳴海さんが娘のように可愛がっていらして、「神戸の侑香のところに行けば俺の資料は全部揃っているから、そこに行ってくれ」という遺言を遺されて、それでその資料のお陰で『全詩集』もできたという、もう大変なそういう方でございます。

それから、調布からいらっしゃいました田上悦子さん。先ほどの鳴海さんの貴重な映像を見つけ出して、あれは先ほどのは、田上さんのお宅でございました。磯村英樹さんなどもちょっと写っていましたけれども、奄美の島唄の会をしたときの映像で、本当に貴重な映像をお持ちくださいました。田上さんの弟さんと鳴海さんの演劇青年時代がちょっと接点がありまして、そういう方でございます。

それから、川崎からいらっしゃいました山本聖子さん。こちらは鳴海さんとは直接お知り合いではなかったのですが、鳴海全詩集を非常に熱意と誠意をもって読んでくださりまして、これから大鳴海論を展開するという意欲に燃えていらっしゃいます。

それから、野田からいらっしゃいました鈴木文子さん。鈴木さんも大変お親しかった方で、鈴木さんのお母様のことを鳴海さんが大好きで「おっかさん」というふうに呼んでらして、「おっかさんの煮しめほど旨いものはありやしません」というふうに、お母様のことを気に入ってらした方でございます。

それから水崎野里子さん。最後になって申し訳ありません、船橋からいらっしゃいました。最近もう精力的に鳴海さんの詩論をどンドン書いてらして、鳴海さんの詩の翻訳もなさっていらっしゃいます。これからどンドン鳴海さんに取り組んでくださるといふ、非常に熱意のある方でいらっしゃいます。

そういう方々でこれから井戸端会議ですので、ほんとにざっばらんに何でも、面白いこと、可笑しいことをしゃべってしまおうという感じで進めさせていただきます。先ほど武力也さんもちょっとおっしゃってましたが、ほんとに鳴海さんという方は女性に人気のある方で、死後四年も経ちますのに、こうして多くの女性達、まあ男性もですけれども、集まれるっていう大変不思議な存在だと思うんですけ

れども。鳴海さんってどうしてそんなに魅力があるんだろうか、その衰えない魅力っていうのはいったいどういうところにあるんだろうかと、まああまり堅苦しくならないで、思う存分に、もう論理的じゃなくでよらしいですので、どんどんおしゃべりしていただきたいと思います。

岸本さんなどはいかがでしょう？ 沖縄と千葉でちょっと離れていらっしやいましたけれども、非常に密着した鳴海さんとの関わりというのをもちだったと思うのですけれども。鳴海さんの魅力というのは、まずどういうところでしょうか？

岸本マチ子 はい。「密着した」っておっしゃられると(笑)ちょっと困ってしまうのですが。わたくしは鳴海さんという方が、ひと言で申し上げると、やはり「優しくて、やっぱり男だな」という感じがしました。非常に男の魅力を持っていた方じゃないかなという感じがします。そしてその「優しい」ということがただ普通に言う優しさではなくて、実はわたくしはいろいろと事件に巻き込まれていろいろありまして、そして自分の身から出た錆なんですけどいろいろなバッシングに遭いまして、その時に真っ先に、いちばん最初に声を掛けてくださったのが……鳴海さん……だったんです。だから、やっぱり彼の優しさっていうのはただ単なる優しさではなくて、先ほどおっしゃっていらっしやいましたが、何ていうんですかね、筋金入りっていうか、「階級憎悪」ということを(笑)先生がおっしゃってましたけれども、その階級憎悪というものが底辺にあって、それに対してこうバッシングを受けたり、それからいろんなそういう……要するに、人間社会というのは自分達が生き残るために誰かを弾き出さなければいけない、そういう社会なんですね、ですから土農工商なんてものがあったり、インドなんかのカーストなんていうのがあったり、そして資本主義があったり、共産主義があったり、そういう組織に属さない、そういうものに入りきれないいわゆるアウトサイダーみたいなもの、そういうものはどんどん弾き出されて、どんどん切り捨てられていくっていう、そういう社会的なものがあるわけですよ、そういうものに対して敢然と鳴海さんは、そういうふうに切り捨てられた者に対していち早く目を向ける、言葉を掛けてくださる。その優しさ、そういうものに非常に感激しました。

それで、彼こそはやっぱり男だなということで、わたしはこういう会があったらできるだけ来たいなという気持ちでおります。そして今日まいりまして、驚きました。二千元では安い！ 何か申し訳ないなっていう感じがして(笑)、あとで寄付したいと思います。とっても素晴らしい鳴海さんの朗読、もちろん今の津軽三味線とか武力也さんの朗読、みんなもう。それから先生のお話、非常に良かった。もう全部、全部良かった。その中で特に鳴海さんの朗読を写真で再現して拝聴できたということ、これはわたくしにとって今日のはるばる沖縄から来たとっても収穫でした。ほんとうにありがたかったと思います。ありがとうございました。

大掛史子 はい、ありがとうございました。

やはり遠くからいらした方を優先させていただいて。玉川さんはけっこうお酒も強くて、鳴海さんと飲む機会というのはずいぶんおありだったと思うのですが、そのあたりのことから、鳴海さんと飲んでいて困ったとか、いろいろ何かエピソードなこと、ちょっと教えてください。

玉川侑香 もう鳴海さんと飲んでずいぶん困りました。初めて出会ったのは、『詩人会議』のパーティーなんです。わたしはフラッと出掛けて行ったものだから、その時に鳴海さんが初めて声を掛けてくださって、「どこから来たの？ 送っていこうか？」って言って。「ああ親切なおじさんやなあ」と思ってね。あ、じゃあ送ってもらうんだって。「駅を教えてください」って言ったら、鈴木文子さんじゃなかった？ 「鳴海さんになんか送ってもらったら駄目、駄目！」とか言ってね(一同笑)、出て来てつよく間に入ってくださいのね。何でかなあと。それからあと、意味がわかりました。(笑)

神田で一度飲んだ時には、ほんとに二人で一升瓶を空けるくらい飲んだんです。もちろん七、三か四分六ぐらいなんですけど。何かもう頭が朦朧としてきたなかで非常に鳴海さんに『列島』の話聞いて。またその頃わたしは詩を書き始めたばかりで、『列島』がいったい何なのか、『荒地』が何なのか全くわからなくて。でもそのすごい熱弁をね、わたしはその鳴海さんのお酒の中で聞いた。あの熱っぽい詩に対する情熱であるとか、彼の生き様であるとか、何かそういうことがすごくて。それはいい

お酒でした。

それから、関西へ来られてね、時々お酒の席を付き合った時はもうほんとに大変でね。一度姫路で、『姫路文学人会議』というところで鳴海さんを招待して、それで飲んだんですが、その後ホテルまで送って行くのに、わずかこの歩道橋を渡るこれだけが一時間かかったんです。一段上がってはもう何かいろいろいっぱいね、彼の文句を聞いて。なんかわけわからないけど、つかみかかれて。「ああ鳴海さん、ホテルはあっち、あっち！」ってまた二段上がらすと、三段降りて帰ってくるっていうね。そういうことでほんとにね、鳴海さんのお酒にはずいぶん後は困りました。けど、今思うと何かすごく懐かしいですね。

大掛史子 はい、ありがとうございます。

何か鈴木さんはお寺で鳴海さんと一緒にお泊まりになったという体験をお持ちなのだそうですけれど、そのあたりをちょっと披露してください。

鈴木文子 わたくしがですね、鳴海さんとの最初の出会いといいますのは、千葉に『千葉詩人会議』というのが一九七四年にできて、今日もお見えになっていますけれども遠山信男さんが『千葉詩人会議』の代表でいらっちゃって、それで市川で発足式をやったのですけれども、その時に初めて鳴海さんにお会いしました。その後鳴海さんと遠山さんがけっこうわたしのことをちやほやしてしてくださいまして、「陸に上がった蛸の話」という詩をよく遠山さんと鳴海さんとお二人で「あの詩は良かった」とかなんとか、いろいろ話して下さっていました。それからですね、一九八一年に鳴海さんから『詩人会議』の常任運営委員をバトンタッチいたしました。「文子、おまえがやれ」ということで鳴海さんからバトンタッチしまして、それからずっと詩人会議に居るわけですが。

今大掛さんから話がありましたお寺のお話というのは、皆さんご存知のように、不受不施派の研究者でもいらっちゃったわけで。わたくしは、あれは……そうですね、国立歴博ができましたのが一九八三年の春の頃だったと思います。それで、まだできたばかりで、そこを見に行きながら、千葉県に多古町という不受不施派のその町一つ全部が不受不施派の信徒の方でいらっしゃる所があるのですけれども、そこに今はもうお亡くなりになりました上林猷夫先生なんかと一緒して、正覚寺というお寺に泊めていただいて、それで朝の御勤めから何からずっとそこで過ごしたことがございます。その時に、その多古町というのは忍者の町のようにできておりまして、どこに行っても突き当たる。それで、二階には隠し部屋みたいなのがありまして、それで普段は梯子は隠してあるのですが、手入れがある時は梯子を登って隠し部屋に隠れていたというような、そういうような町でした。ですから、今から二十年くらい前だったと思います。

それでその時に、不受不施派は「隠し墓」というのがありまして、普通の一般の人のお墓の後ろにいわば隠れキリシタンみたいな感じで小さなお墓があったんですね。それで「これが不受不施派なんだ」ということを教えていただきました。それと、全部墓石を埋めてしまっ、その埋められた残りというかそういうものが見えているその所で、鳴海さんと上林先生が朗読をなさいました。その時に、二人共もう目に涙を浮かべながら……あの時の朗読というのは、忘れられません。何か先ほどビデオを見せていただいて、「ほんとうに鳴海さん、まだ死んでないなあ」なんて、そんなことを思いながら見せていただいておりました。

大掛史子 はい、ありがとうございました。

そのビデオの提供者田上さん、鳴海さんは昔演劇青年でいらっしゃいましたので、そのあたりのことをちょっと何か。田上さんの弟さんも鳴海さんと同じ劇団で演劇のことに関わっていらっしゃった、そういうご縁の方でいらっしゃいます。田上さん、そのあたりのことをちょっと教えてください。

田上悦子 直接わたくしが演劇に関わっておりませんので、何かちょっとあんまり痺いところに手が届くようなお話をさせていただくということがちょっと出ないんですけれどもね。

鳴海さんにお目にかかりまして、しばらくちょっと何回かお目にかかったり手紙のやり取りをしたりしております、『光芒』の会で初めてお目にかかったんですね。それでそのあたりのいきさつはちょっと時間があまり無さそうなので飛ばしまして、演劇に関するお話を、なんでするようになったのかをちょっと今ね……ちょっと思い出したんですけどね、奄美島唄会のホームコンサートをわたくしの家でしました時に、鳴海さんとかそれからこちらの大掛さんとか家の方にいらしてくださいました。それでその時の朗読をしてくださったのが、先ほどのビデオです。

その時に演劇青年が居まして、その方が公演する予定のチラシを持って来て、それぞれのお座布団の上にみんな配ったわけです。そこに鳴海さんがお掛けになって、それは劇団の名前が「東演」というのかな？ 昔は「東京自立演劇協議会」ってここに、『全集』の後ろの方に書いてあるのですが、そこで鳴海さんが関わっていらしたみたい。年表に書いてありますのでね。これを略して「東演」っていうものですかね？ 今でもずっと活動を続けておられます。で、鳴海さんがそのチラシをご覧になりましてね、とても懐かしがって、会が終わりましたあと劇団関係のことをずいぶんあれこれ質問してくださいました。

それでその中で、わたくしはほんとにちょっと存じ上げなくて申し訳ないのですが、鳴海さんが、……あつ、この中にですね、会場には演劇界に関わる方もいらしてご存知の方もおありと思うのですが、鳴海さんから秋田雨雀さん、それから八田元夫さん、下村正夫さん、瓜生正美さん、土方与志さん、それから池田勝さんとか、ハチケンの会とか、青年劇場とか、立て続けにいろんなご記憶の昔関わりを持たれたらいいという偉い演劇関係の先生方のお名前を出されましたので、弟が演劇の仕事をしてるってこともわたくしは伝えましたので、「聞いてください。懐かしい、懐かしい」って盛んにおっしゃっていました。それで、それから何日かしまして、弟の方に鳴海さんがおっしゃった名前の方の消息を聞いたんですね。それで、鳴海さんと弟は年齢の差がありまして、十年か十五年くらいあとに演劇界、学校で勉強しましたので、こういう秋田雨雀さんとか八田元夫さんとかそういう方々のお名前はもう偉い先生としてももちろん存じ上げておりましたけれども、もうちょっと年代の差があるものですからね、直接は弟は関わってなくて、で、鳴海さんはとても懐かしがっていらっしゃったのに直接的なお話をお伝えすることができませんで、非常に残念に思っています。でも、何人かぐらいはキャッチできるかもしれないって。それで、弟は新宿でバーを経営しておられて、そこに演劇関係の方々がお客様でたくさんお見えになるものですから、鳴海さんをお誘いして弟の店に連れて行きたいって思っていたんです。それでその旨をお伝えしましたら、「ぜひ行きたい」ってとっても懐かしがっておっしゃってくださったので、いつにしようかなあって思ってる矢先にお加減が悪くなってしま

いまして、とうとうご不幸なことになってしまって、わたくしはもうものすごく心残りなんです。お店にお連れしましたらね、池田勝さんという方はまだ若くて今もご活躍中で、そういう方との関わりも鳴海さん思い出されたかもわからないのですけれど。そのへんがちよっとわかりきれないので。ちゃんとお伝えできないので、すみませんでした。

大掛史子 ありがとうございます。先ほどの映像は、鳴海さんが亡くなる前年です。三月でしたね。一九九九年の三月で、鳴海さんは二〇〇〇年の八月ですから。ほんとに最後の映像ではないかなと。大変貴重な映像でございました。

さて、水崎さんと山本さんは直接鳴海さんとはお知り合いではなかったのですけれども、大変もう鳴海詩集を深く読んでくださって、いろいろともうお書きくださっています。

まず水崎さん、どうして鳴海さんのことをいろいろとそういうふうにお思いになったか、そのあたりをちよっと砕けた感じでお願いたします。

水崎野里子 わたくしの鳴海さんに対する姿勢というのは皆さんと違って、わたくし『光芒』に入っておりますが、ほとんど一年か二年の差でわたくしとすれ違いでございます。ですので、わたくしは実際に鳴海先生にはお目にかかっておりません。ただ、やっぱり『光芒』にありまして、結局佐野様とかいろんな方から『鳴海英吉全詩集』の発行まで承りまして、出版記念会にまいりました。それが具体的な鳴海英吉さんとの出会いの具体的な始まりですので、やっぱり『光芒』という雑誌が無ければわたくしは鳴海さんに会わなかったし、わたくしが千葉県に住んでいなければもちろん会えなかった。やっぱりこの縁というのは、やはりわたし、非常に重視しております。やっぱり千葉という土地柄と、それと幸運にもわたくしが『光芒』に居たということと、それから、その席で鈴木比佐雄様にお目にかかって、すでに鈴木様が『詩と思想』に鳴海英吉論を書いていらっしやいまして、それをわたくし拝読いたしました。『詩と思想』という雑誌もちよっとわたくしはかなり関係させていただいている雑誌なもので、大変ご縁があったということだと思いますが、残念なのはご本人に一回も直接会ってないということ。逆にそれがいいのかなあという感じです。

大掛史子 はい、ありがとうございます。

ちなみに、鳴海さんは「先生」と呼ばれるのが大っ嫌いで、「よせやい！」と言ってもう怒る(笑)と思いますので、「鳴海先生」はやめてください。

水崎野里子 「先生」やめます。はい。鳴海…さん。

大掛史子 (笑)鳴海「さん」。「先生」なんて言うともうほんと、さっきの武力也さんじゃありませんけれども、ゴツンとやられますので。

水崎野里子 あ、怒られちゃう？ やられちゃう。はい、失礼申し上げます。

大掛史子 ありがとうございます。

あと、山本さんですね。山本さんも大変『全詩集』を深く読んでくださって、詩の中から鳴海さんってほんともうどういう魅力を感じられたか、これから鳴海さんの詩論をいろいろお書きくださるということですので。そのあたり、ちよっと抱負とか何でも結構です、お願いたします。

山本聖子 先ほどから実はここへちょっと居心地が悪くて、お尻のへんがむずむずしていたのですが、ほんとに不思議なご縁でここに座っております。

実はわたくしが詩を書いて、きちんと詩を書いていこうと思うところへ引っぱてくれた人物がおりまして、その方がたまたま大掛さんと近い方だったということで、なぜかここに座ることになっています。そういうきっかけでこの前のシンポジウム「全詩集の刊行を祝う会」に出させていただいて今日があるわけなのですけれども。

居心地が悪いというのは、やはりちょっと考えてみると、ジェラシーのようなものがあるんだっていうふうにはさっきから考えております。先ほど映像を見させていただいて、「ああ、やっとお会いできた。鳴海さんという方はこういう方だったのか……」というような、ちょっと一人でうるうるしていたのですが。皆さんが「こういう方とこんな関わりがあります」と言うのをさっきから羨ましく聞いてまして、やはりちょっと遅れて来てしまったなあという大変残念な思いがあります。でも、先ほど水崎さんがおっしゃいましたように、遅れて来たからこそ、ご本人を存じ上げないからこそ、純粋に詩と向き合っているつもりではあります。とても埋められるようなものではないと思いますが……。

実は、わたくしが前にちょっと評論集を書き下ろしで出させていただいた『潮流詩派』という会の村田正夫という人物がおりまして、実は鳴海さんもほんの少しの間なのですが『潮流詩派』というところにいらしたことがありまして、作品をいくつか載せられたという経過もあります。実は村田正夫という人物と何かどこかちょっと似たようなところがあるんじゃないかなというのが、わたくしの最初の印象だったのです。少し幾つか考えてみますと、例えば江戸っ子であるとか。ですからいろんなリズム感というんでしょうかね、江戸弁のリズム、庶民のリズムというのが体内にある方だということがあります。ですから、たぶん共通しているんじゃないかと思えますけれども、大変言葉が多い、多弁である。それで、多作である。村田正夫からの推測なのですが、たぶんそういうところが似ている。何よりもやはり、先ほどから伺いました「女性に優しい」というようなこともちょっと共通しているようなところがあります。そちらの方の勉強もしていることから、わたしも『全詩集』を手にしてしまった以上、やはりこのままではおかないぞ！ と。今にこちらにいらっしゃる方たちのように「こんなことをわたしも知っているんだぞ」というようなことを言えるように頑張りたいと思います。

大掛史子 はい、ありがとうございます。鳴海さんもお喜びだと思います。

岸本さん、『ヒミコ』は、鳴海さんはどうしてそんなに気に入られていたのでしょうか？ もう『ヒミコ』はいい詩集だぞって、「これはもうほんとに素晴らしいから、こういうの絶対書けからな！」って、そういうことをおっしゃってたんですけれども。いかがでしょうか？ 『ヒミコ』と鳴海さんとの関係といえますか、鳴海さんがどうして『ヒミコ』をそんなに気に入られていたか。そのあたり、いかがでしょうか？

岸本マチ子 先ほど長谷川龍生先生が、鳴海英吉さんの詩はシュール・ドキュメンタリーの原型じゃないかということをおっしゃってました。わたくしはね、まさにその通りだなんていう気がするんですね。で、わたくしと鳴海さんの詩がどこか底辺で結び合っているようなところがある、というのは鳴海さんがおっしゃり始めたんです。それで、その『ヒミコ』に関してなぜかとても気に入ってくださって。それ

は、さっき長谷川龍生先生がおっしゃったシュール・ドキュメンタリーで書かれたものだからじゃないかなって、わたくしは今気がついたと言うとおかしいのですが、そんな感じがしたんですね。ですからそういう意味で、かなり鳴海さんの胸の奥に共鳴するものがあつたのではないかなって感じがしまして、その点でとってもうれしかったです。以上です。

大掛史子 はい、ありがとうございました。

玉川さんも『文芸日女道』をお出しになつていて、鳴海さんももう毎号のように書いていらっしゃるんですけど、そういう玉川さんのあの『文芸日女道』に鳴海さんがお書きになられたいきさつとか、どうしてそういうふうに関心で神戸までいらして関わりをもつたかとか、そのあたりはいかがでしょう？

玉川侑香 どうなんでしょうねえ……。わたしは初めて詩を書き始めて、全く自分の地元の神戸には全然知り合いが無かつたわけなんです。それで直接『詩人会議』という東京まで出掛けに行って、そこで知り合つて。でも、東京で発表してたつてそう作品がでていくわけじゃなし、「地元でもっとやればいいよ」ってということで『文芸日女道』を紹介されたんです。それで逆に東京から姫路の『文芸日女道』という市川宏三さんがされている雑誌を紹介されて、それでそこへ出かけつていった。それでわたし自身がその『文芸日女道』の同人になつて書き始めたもんですから、鳴海さんにしては親心で何か向こうへ養女だか何だかに出したんだから、どうも最後まで睨んでないと危なっかしいなっていう、そういう親心があつたんじゃないでしょうか。ですからいろいろ関わつてくださつて、作品もほんとうにたくさん頂きました。

大掛史子 はい、ありがとうございました。

鈴木さんもほんとに家族ぐるみのお付き合いで、お母様のこともありますし。どうでしょう、鳴海さんのもっと知られざるエピソードみたいな面白い話がありましたら、お願いいたします。

鈴木文子 そうですねえ、面白い話といつて、やはり「酔っ払いの鳴海英吉」だなあと思うんですけど。わたくしの地元はキッコーマン醤油の野田市でございまして、そこでトウキビ焼酎というのができるのですが、そのトウキビ焼酎が鳴海さんは大好きで、いつも家に見えて焼酎を飲み終わると、「これ、文字くれえ！」って言って残り分を持って行かれるようなお酒好きですね。

それで先ほど大掛さんからご紹介がありましたように、「文字なんかどうだっていいんだ。おっ母さんの料理が食いてえ！」って言われてまして。それで、わたくしの母がちょうど高血圧で倒れました時に、千葉の『詩人会議』の方が皆さんと《おっ母さん頑張れよ》っていう色紙を書いてくださいました。そこにですね、鳴海さんが「これだけは鳴海さんのあれだから間違つてはいけないと思って書いて来たんですけど、その色紙に《おっ母さん大好き 大好き 詩なんかどうだっていい おっ母さんの煮しめ以上のものがありやしません》と、こういうようなことを書いてくださいまして。それでこれを見た家の母が、「大好き」だなんて、もう大正生まれなもんですからぼつと赤くなつたりしてまして。それが、鳴海さんが亡くなって、「鳴海さん死んじやつたあ」って言いましたら、今特養ホームに入っていますので、そのお話をしても、鳴海さんの話をしても、今全然わかつてもらえなくて、「あ、来たさあ〜 コリヤコリヤあ〜」っていうね、鳴海さんのその言葉に合わせるような感じで、車椅子で「コリヤコリヤ」言いながら廊下に行く母親を見て、わたしはすごく、何て言うのかなあ……。鳴海さんの心が伝わつたのかなってような、そんな感じがしております。

それで、先ほど不受不施派の話をしましたけど、確か奥様と一度不受不施派のことで千葉県のわたくしの近くのお寺に調べに来られた時に、この時もやっぱり飲んでしまわれて、駅に調べた物を全部忘れて（笑）行かれてしまった。そしたら、わたくしの駅は田舎なもんですから、「鈴木さんのなんかさつき酔っ払つた人が、何か忘れて行つたよ」って駅から電話がありましてお伝えしたような、そんなエピソードもございます。

鳴海さんとお話といえばほんとにたくさんありまして、もうこれ話したら三時間でもそれこそお話

しできるほどあると思うんですけども。最近わたくしも歴博に懐かしいなと思ひまして、それから戦蹟のちょっとめぐりがありましたので歴博に一人で行ってみました。歴史博物館に行って「ああここだったわあ。二十何年前に鳴海さん達と、できたばかりのほんとにまだ展示物も少ない所だったなあ……」と思ひながら見ていたら、何か道を間違えてしまひまして、帰りに、どういふわけか鳴海さんが焼かれた火葬場の前に行つてしまつたんですね。で、なんか……「やあこれは鳴海さんの焼かれた火葬場だわ」と思つて帰つてきて、また町を一回りして、また帰つて行つたらまたそこに着いてしまふんですよ。それが何とも不思議で。なんかとても……今日もお墓参りして来ましたが、鳴海さんが死んだなんてほんとに思へない今の心境です。今日は奥様もお見えになつてゐるようですけれども、ほんとに懐かしいことばかりで。玉川さんと二人で墓石をピタンと叩いて(笑)、(…生きていた時は、ほんとに「うるさい酔っ払いだ」なんて言つてごめんね！…)とやつて来ましたが、ほんとにいい方でした。

大掛史子 はい、ありがとうございます。

今日は鈴木さんが、鳴海さんからいただいたハーブ、それをお茶に煎じるようにしたものをお墓参りした人達みんなに配ってくださりまして、それで「これ、帰ったら熱いお湯を注いで、鳴海さんを思い出しながらハーブティーを飲んでちょうだい」ってくださったんです。それは鳴海さんから頂いたもので、「絶対に枯らすなよ！」ってしつこく(笑)言われていた、そういう貴重なものを頂きました。

それで田上さん、鳴海さんは非常に音楽にも興味を持ってらして、今日の津軽三味線なんかほんともう大喜びなさっていたと思うんですけれども、あの時の奄美の島唄の時も、奄美のあの島唄をお歌いになった二人のそばにもうぴったりお座りになって、ずうっと何か話し込んでいろんなことを聞き出していましたけれども、ああいう鳴海さんというの、ちょっとあの時初めて接しまして、驚きました。そのあたりどうでしょうか、音楽に興味をお持ちの鳴海さんっていうのは。何かございますか？

田上悦子 いえ、あたくしも初めてで(笑)。奄美島唄に関心をお持ちっていうこと、あたくしが存じ上げて声をお掛けしたわけじゃないんですよ。ですけれど、二人の唄者の方々のおそばにね、じっと座っている質問などされてらしたっていうのは、わたくしもちょっとびっくりしました。とても関心深くお持ちだったのかもしれないですね。ええ……。それから、先ほどとても映りの悪い見にくいビデオをご覧いただいて、ありがとうございました。

大掛史子 はい、ありがとうございます。

水崎さんは、何かいろいろと鳴海さんの民衆性といえますか、それからユーモアの精神とか、そういう観点からけっこうちょっと独自色のある評論をお書きになっていますが、やっぱり鳴海さんの詩集をお読みになってそういう点がいちばん印象に残ったところでしょうか？

水崎野里子 そうですね、実は鳴海さんとの出会いというのは、やっぱりわたくしが土曜美術社から『現代アメリカアジア系詩集』というのを一月に出しまして、その翌月に確か鳴海英吉さんの出版記念会があって本を頂いたという経過がありまして。まあそれはおそらく偶然で、わたくしの『現代アメリカアジア系詩集』というのがべつにその時にできなやいけなわけではなくて、おそらく偶然に一月に出て、その翌月に鳴海英吉さんの全集が出る。偶然にすぎないと思うんですけれども。やっぱりちょっと二年間くらい『現代アメリカアジア系詩集』が出なかったんですが、それが出るようになった時点と、それから鳴海さんの全集が出たというのは、今から考えてそう偶然ではないんじゃないかと考え始めた。それでわたくしはまず鳴海さんのを読みますと、結局わたくしが訳したアメリカのアジア系の方の詩とある程度共通性があるということですね。「ある」ではなくて、「断然共通性がある」ということで。それでその当時一つ不満だったのは、まあその時点でわたくしの方の翻訳『アジア系』というのは、ほとんどやっぱり皆さんあんまり「ああ、そうか」ということでね。もつぱら周りにはまあ「水崎さん、アメリカの現代詩はどうなのか」とかね、そういう方を聞いてこられてまして。それで大手の詩の会議なんか行くと、まず英・米の一九二〇年代のいわゆるエズラ・パウンド、エリオット、そういう詩がまだ優勢であって、わたくしの一九八〇年代のアメリカの、それもアジア系の詩人のなんてのはまあ、「出した

ね」ってことだけで、あんまり評価されてはいなかったような感じがひがみか何かしれないけどしております。

やっぱりその中で、鳴海さんの民衆性、ユーモアというのは、ひっくり返せばいわゆるわたくしにとってはインターナショナルリズムに通じてきた。それでひとつ。それから今、「マイノリティ」とか「フリンジ」とか、やっと言われてまいりましたけれども、そういう文学の視点、いわゆる英・米グローバルな、一九〇〇……前世紀の後半のグローバルな文学状況、その中で鳴海さんの詩を読んだら、逆に……ひっくり返るんじゃないかと。いわゆる日本人にとってインターナショナル性というのは、今まで逆を行っていたんじゃないかと。いわゆる一九二〇年くらいに考えた西洋のインターナショナル性をそのまま日本は信じているんじゃないかと。これじゃいけないんじゃないかと。| | そういうことを考え始めて、ちょっと評論を書き始めたわけですが。民衆性、ユーモアっていうのは鳴海さんの中心であって、それをわたくしはいわゆるアジア性、日本性、それとグローバル性というのをどう結びつけていか、頭じゃなくてももっと肉体的全体でどう結びつけていっていかってというのが、これからの課題ですね。山本さんの方がよくやられていると思います。

大掛史子 はい、ありがとうございました。

山本さん、これから鳴海さんの詩論をいろいろお書きになられると思うのですが、やっぱり何を伝えたいでしょうか？ 鳴海さんの詩集を知らない人に対しても、もうすでに読んだ人に対しても、どういうことをPRしたいでしょうか？ ちょっとそのあたり、お考えをお聞かせください。

山本聖子 そうですね、いちばんわたくしが感じたのは、「常に死に続けている」という意識……がおありになって、なおかつそこからいかに今度は言葉や詩に絶望せずに作品を書いていく方向、それから生きるという方向に結びつけていくその中の哲学的な転換ですね、そういうところにいちばん惹きつけられているのですが。日々わたしたちもそういう意味では底辺のところでそれが共有できるのではないかと。わたしなんかと言うようなことじゃないよって真っ先に怒られそうなんですけれども、こういうところで安穏と生きているわたしなんかでも、やはりほんとうは「日々死に続けているのだ」という意識をどこで持てるか、そのへんの手触りってうのでしょうかね、そうところを自分なりに探してみたいということがまず大きくあります。その中から、皆さん何人かおっしゃっていたようなのですが、やはり「新しい生命観」とおっしゃったのですが、「新しい」というよりも、たぶんそれが日々死に続けることから、「零」という詩がありましたけれども、やはり日々死に続けるからには次の一歩はやはり「もう一度生まれ直して生き続ける」という繰り返しがあるわけで、そのへんが例えば単なる反復ではなくて、やはり新しく一つひとつが生まれ続ける、そこからものすごい大きな生命観というのが生まれてくると思うんですね。そのへんがわたしに太刀打ちできるかどうかわかりませんが、探りたいところです。

大掛史子 はい。非常に哲学的な展望を述べていただきました。

ちょっと時間がもう無いものですから、一応「井戸端会議」ですので、特に結論とかまとめということとは(笑)ちょっといたしません、だいたいまあこれで……。まだまだ鳴海さんのことをお着にお話ししたら、ほんとにさっき鈴木さんのおっしゃったように夜が明けてしまいますので。その続きはこれから、すぐ近くの所に白木屋というコンビニがありましてその上に席を取ってございますので、そこで飲み、かつお腹もお空きになられたと思いますので食べ、おしゃべりをしながら鳴海さんをまたお着にして楽しく時間を過ごすということにさせていただきたいと思います。そこは会費は二千元でございます。ぜひ皆様、すぐ近くですので、このあとそちらの方でまたさらに鳴海さんをお着におしゃべりしましょう。

ちょっとこんな感じで大変申し訳ございませんが、これで井戸端会議を終わらせていただきます。ありがとうございました。……(一同拍手)……

鈴木比佐雄 長い間ありがとうございました。これで「第一回 鳴海英吉研究会」を終了させていただきます。また機運が持ち上がりましたら第二回を開催したいと思いますので、その際はぜひ参加していただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。講師の皆様、会場の皆様、ありがとうございました。……(一同拍手)……